国　　語

注　意

一　試験開始の合図があるまで問題冊子を開かないで下さい。

二　この問題冊子は全部で**十三ページ**あります。

三　解答用紙の所定欄に**受験番号とマーク、氏名とフリガナ**を必ず記入して下さい。

四　解答用紙には問題番号が1から50までありますが、**解答に使用する問題番号は1から41までです。**

五　解答時間は**六十分**です。

六　**解答用紙は必ず提出して下さい。**

七　問題冊子は持ち帰って下さい。

受験番号欄記入例

2025

受験番号				
1	9	7	0	5
	⓪	⓪	●	⓪
●	①	①	①	①
②	②	②	②	②
③	③	③	③	③
④	④	④	④	④
⑤	⑤	⑤	⑤	●
⑥	⑥	⑥	⑥	⑥
⑦	⑦	●	⑦	⑦
⑧	⑧	⑧	⑧	⑧
⑨	●	⑨	⑨	⑨

数字の位置に注意してマークして下さい
ゼロは一番上にあります

マーク式解答欄記入上の注意

1．解答は，HBの黒鉛筆を使用して丁寧にマークして下さい。
2．訂正する場合は，プラスチック消しゴムで，きれいにマークを消して下さい。
3．所定の記入欄以外には，何も記入してはいけません。
4．解答用紙を汚したり，折り曲げたりしてはいけません。

マーク例

良い例 ●　悪い例

薄いマークは読めません

Ⅰ　次の問題文を読み、後の問いに答えなさい。

情報学にはコンピューティング・パラダイムとサイバネティック・パラダイムの二つがあると西垣通(注1)は提唱する。コンピューティング・パラダイムの情報学は、クロード・シャノン(注2)の情報理論によって確立された情報処理の数学的理論である。そこでいう情報とは意味を捨象した記号であり、情報処理とはこの無意味な記号の確率的な計算である。たとえば送信機と受信機の間で信号をいかに効率的に伝達するかというように、情報システムを外から客観的に対象化して、その入出力や内部処理を観察する。問題となるのはシステムをいかに制御するかである。これに対して、サイバネティック・パラダイムの情報学は、ノーバート・ウィーナー(注3)のサイバネティックスに由来する。サイバネティックスは視点をシステムの内に置く。システムをいかに制御するかではなく、システムがいかに制御するかが問題となる。システムの内から主観的に、あるいはより精確には主観と客観ないしシステムと環境が構成されてくるところのプロセスに即して観察する。システムが未知の環境のなかでいかに目標を達成するかをシステムの視点から研究する。システムの手に負えない圧倒的に制御不可能な環境のうち、システムに制御可能なことだけをよく制御することでどうにか目的を達成すること。環境のままならなさを創意豊かに縮減することで、生き抜ける環境世界を構成すること。サイバネティックスのホンリョウ(a)はそのような生物が生きるための知恵にある。そこでいう情報とは根源的には、生きものにとっての意味すなわち価値をもたらすものであり、これを生命情報という。

コンピューティング・パラダイムとサイバネティック・パラダイムの違いはタキ(b)にわたるが、ここではまず認識能力としての感性観を再考するという問題関心から、両者の認識論的な違いに着目するのがよいであろう。ネオ・サイバネティクスは人がものをどのように認識しているかについての理解の仕方を二種類に区別する。表象主義と構成主義である。コンピューティング・パラダイムは表象主義を、サイバネティック・パラダイムは構成主義を採用している。感性(注4)とは低次の認識能力であるという考え方は、表象主義と構成主義という二つの認識論ではそれぞれどのように捉えられるであろうか。

表象主義では人がものを認識するというとき、認識する主体が認識される客体を認識すると考える。このとき認識主体の内に形成される認識対象の像が表象である。まずはじめに認識する主体と認識される客体がそれぞれ独立に存在しており、それから両者を関係づけるようにして認識がおこなわれる。したがって、たとえばまずはじめに認識するという行為がおこなわれ、それによって認識する主体と認識される客体が生じてくるとは考えない。まず一方に客観的な実在世界があり、そして他方に主観的な認識主体があり、それから認識主体がそれなりの仕方で多かれ少なかれ忠実に客観的な実在を自分の主観的な世界の内に表象する。感性とはその初歩的な認識能力であるということになる。観察者の働きを考慮しなくても通用する古典的な科学は概ねこの表象主義を採用してきたし、むろんそれで問題が生じない学問分野はそれでよいであろう。

ところが、生物が生きている世界について考えるときは表象主義ではうまくいかない。生物が主観的にしか世界を観察できない以上、主観から独立した客観的な世界の実在はどこまでも仮説にとどまる。生物は自分に見えているこの主観的な世界から外に出ることはできないし、その外については［A］。主観の外に独立する客観的な実在世界なるものは生物の視点からするとダイタン(c)な仮説である。そういう仮説から出発

するより、まず自分に観察可能な周囲を取り巻く環境世界から出発する方が学術的には着実であろう。そういう生物の生きる各自の世界を、生物学者ヤーコプ・フォン・ユクスキュル(注5)は環世界と呼んだ。

ところで、それぞれの生物が生きる環世界はどのようにして作られるのであろうか。構成主義はまさにこの環世界を生きることそのものが構成していると考える。生きものは自分の生きる世界を自分で構成している。しかるにここで一つ不思議なことが浮かびあがる。生きものは自分の生きる環世界を自分で構成しているが、しかし自分自身がまた環世界の内にいる。自分がその内にいるところの世界を自分が構成しているという再帰的な自己準拠性である。環世界はその生物の周囲を取り巻きながら、しかもその生物自身の内にあるということになる。つまりそれは世界が認識対象として認識主体から独立して存在しているという意味(エ)の実在論ではないが、さりとて認識する主体の内に認識されるがままに世界が存在しているという意味での観念論でもない。構成主義は認識主体が認識対象を［B］に構成することをいうのではない。むしろ構成しながら構成され、構成されながら構成する、そういう［C］な構成である。たしかに人は周囲を取り巻くあれこれのものを自分の内に表象している。あるいは感覚キカン(d)を通じて感受している。ところがそういう周囲を認識している自分自身をも含む世界をそもそも構成している自己がいる。つまり認識する自己が内在する世界を、自己が内在的に構成している。これが生きものの生きる世界であるというのが、サイバネティックな構成主義の考え方である。ようするにそこでは認識(オ)とはすなわち構成なのである。したがってこの場合、感性がもし低次の認識能力であるというなら、その認識はすなわち環世界の自己構成的な自己認識のことになる。

ようするに生きものの世界において認識するというのは自分自身が生きる世界を構成すること、つまりは生きることをいう。そこでは知るということはすなわち作るということである。生きものの感性は、刺激を受容したり信号を受信したりする感覚的な認識よりも、自分自身がその内に生きる世界を作るという創造力の感性である。この創造力はネオ・サイバネティクスにいう情報（内的形成）、より精確には基礎情報学にいう生命情報（生命の内なる形成の働き）の創造力である。生きものが自分にとっての意味すなわち［D］を、すなわち自分が生きる環世界を、内的に形成すること。つまり生きるということである。そしてそれ(カ)がよく生きられたかどうかが感性でわかるのである。

（原島大輔「感性と創造性についての基礎情報学的一考察」、出題上の都合により一部改変）

注1　西垣通――一九四八年～。日本の情報学者。
注2　クロード・シャノン――一九一六～二〇〇一年。アメリカの数学者。
注3　ノーバート・ウィーナー――一八九四～一九六四年。アメリカの数学者。
注4　感性とは低次の認識能力――西洋思想において、刺激を受容する感覚キカンの働きを感性と呼び、これを通じた認識は不確実な認識であるため、低次であるとされた。
注5　ヤーコプ・フォン・ユクスキュル――一八六四～一九四四年。ドイツの生物学者。

問一　二重傍線部a・b・dと同じ漢字を用いるものを、次の①～④からそれぞれ**一つずつ**選びなさい。

1　a「ホンリョウ」

① 高速道路のリョウキンジョを通過する
② 紙幣をリョウガエキで硬貨にする
③ 購入品のリョウシュウショを受け取る
④ 家電をリョウハンテンに買いに行く

2　b「タキ」

① 法律のキホンを学ぶ
② 日本にキカする
③ 新人をキヨウする
④ 重要なキロに立つ

3　d「キカン」

① 音楽はキヒンがあるものを好む
② 社長になるキリョウがある
③ 彼の衣裳はいつもキバツだ
④ 書類をキジツまでに提出する

問二　二重傍線部c「ダイタン」の漢字表記で用いられる部首を、次の①～④から**一つ**選びなさい。

4　① にんべん　② にくづき
③ てへん　④ つかんむり

問三　傍線部ア「信号をいかに効率的に伝達するか」とあるが、同様の例として最も適切なものを、次の①～④から**一つ**選びなさい。

5　① 正六角形が並んだ構造で蜂が巣を作る
② リモコンでテレビのチャンネルを変える
③ ゼンマイの仕組みで時計が時間を刻む
④ 新陳代謝して人体細胞が傷を修復する

問四　傍線部イ「表象主義」とあるが、問題文における「表象」とはどのようなものか。最も適切なものを次の①～④から**一つ**選びなさい。

6　① 認識主体が制御不可能な世界と自らを制御することで、像として形作られるもの。
② 認識主体と独立して存在する客体が、科学的観測により実在そのままに認識されるもの。
③ 客観的な実在世界を、認識者の存在の有無にかかわらず数学的に定義したもの。
④ 独立して存在する客観的な実在を、認識主体が主観的な世界の内に形成するもの。

問五　傍線部ウ「むろんそれで問題が生じない学問分野はそれでよいであろう」とはどのようなことか。最も適切なものを次の①～④から**一つ**選びなさい。

7

① 長く採用されたという歴史が表象主義にあるならば、それはそれでよいということ。

② 科学研究の積み重ねによって理解された問題ならば、それはそれでよいということ。

③ 認識主体の働きを無視しても成り立つ学術理論ならば、それはそれでよいということ。

④ 生物の主観性を考慮して構築された学問分野ならば、それはそれでよいということ。

問六　空白部 A に入る最も適切なものを、次の①～④から**一つ**選びなさい。

8

① 実在するともしないともいえない

② 客観的に認識することしかできない

③ 無生物を含む複雑な混沌である

④ 主観的に結論づけることが有効である

問七　傍線部エ「世界が認識対象として認識主体から独立して存在しているという意味での実在論」にあたるものはどれか。最も適切なものを次の①～④から**一つ**選びなさい。

9

① 生命情報　② 表象主義

③ 構成主義　④ サイバネティック・パラダイム

問八　空白部 B ・ C に入る言葉の組み合わせとして最も適切なものを、次の①～④から**一つ**選びなさい。

10

① B＝双方向的　C＝両義的

② B＝一方的　C＝部分的

③ B＝双方向的　C＝部分的

④ B＝一方的　C＝両義的

問九　傍線部オ「認識とはすなわち構成なのである」とはどのようなことか。最も適切なものを次の①～④から**一つ**選びなさい。

11

① 世界には認識主体が内在しており、その世界を自分の内に構成することが認識であること。

② 生きものの生きる環世界が構成されるのは、人間特有の認識行為によるということ。

③ 自己の外側に実在している世界の構成を、客観的に理解することが認識であること。

④ 知覚を通じて獲得した認識によって、独立した客観世界の構成がなされること。

問十　空白部 D に入る最も適切なものを、次の①～④から**一つ**選びなさい。

12

① 感覚　② 価値　③ 表象　④ 信号

問十一　傍線部カ「それがよく生きられたかどうかが感性でわかる」のはなぜか。最も適切なものを次の①～④から**一つ**選びなさい。

13

① 構成主義では知覚を重視するため、外部にある世界を知るには五感を豊かに使って自分の感性によく響かせることが重要だから。

② 表象主義では説明することができなかった生物の生の意味を、構成主義は基礎情報学によるシステムを制御する理論で説き明かしたから。

③ 構成主義では自分に意味のある世界を内的に形成することが生きることであり、それは創造力の感性によって可能となるものだから。

④ 表象主義では世界の全体像を客体として認識できなかったが、構成主義はよく認識することでより世界の実在に近付くことができるから。

問十二　問題文の内容と合致するものを、次の①～④から**一つ**選びなさい。

14

① コンピューティング・パラダイムは、数学的理論によって客観的な実在世界に近付く情報学であるため、情報は意味を捨象した記号として扱われ、人間の認識という主観について言及することはない。

② サイバネティック・パラダイムの登場によって、コンピューティング・パラダイムによる刺激の受容や信号の受信といった内部処理では制御不可能だった問題が制御できるようになった。

③ コンピューティング・パラダイムにおける情報は伝達の効率性が重視されるのに対し、サイバネティック・パラダイムにおける情報は認識主体がその環境に含まれているかどうかが重視される。

④ サイバネティック・パラダイムの情報学は、コンピューティング・パラダイムでは説明し得ない生物の世界認識について、自己が内在する世界を自己が内的に形成する創造力の感性として説明した。

Ⅱ　次の問題文を読み、後の問いに答えなさい。

句集を刊行して、エッセイの依頼が来るようになった。なにをどうやって書けばいいのかわからなかったので、いろんなことを連想して、それらを、あ、そういえば、といった仕方でどんどんくっつけていくことにした。

これをわたしは「そういえばの術」と呼んでいる。

とはいえ、本当に「そういえばの術」だけでエッセイが仕上がることはない。多くの場合、無意識というのは拘束的に働くから、a きままに書こうとしても、なんとなく筋が通ってきてしまうのだ。

ア こうした予定調和にあらがう方法はいろいろある。連句的発想もそのひとつ。連句というのは数人で集まり、五七五の長句と七七の短句をかわるがわる順番に言い合ってかっこいい巻物をつくる遊びだ。一巻をつらぬくテーマのようなものは存在しない。むしろ心象、物象、事象など、自然や人生の多種多様な相を句に描き、できるだけ変化をつくすのがいいとされる。

連句には細かい作法がたくさんある。たとえば連句の最小単位は付句（付ける句）、前句（付けられる句）、打越（前句のさらに前の句）の三句だけれど、付句と打越が似ていると単調でつまらないから、打越に出てくる概念や関連語をつかって付句を書いてはいけない。ほかにも、同じ言葉のくりかえしを避けるための一座一句だの、同種・類似の言葉が近くに来ないようにするための去嫌だの、花や月の句の置きどころを指示した常座だの、イ 巻物が一個の概念や系統にとじてしまわないように全体を構成するコツがルール化されている。ここで面白いのは、こうしたルールを意識せずに句を書くと、かならず重複、反覆、停滞、同趣、同種、同景におちいることだ。人間というのは同じ話をくりかえす。似通った趣向に走る。記憶をひきずる。心とは囚われのb オンショウ、執着をその本性とするのである。しかしそれではいけない。ぐるぐると同じことを考えるな。輪廻を断ち切れ。というわけで「歌仙は三十六歩なり。一歩も後に帰る心なし」と芭蕉は説いた。

この芭蕉の言葉に、わたしはいつも ウ 万華鏡を思い浮かべる。万華鏡では、秩序は常に壊れるものとしてあり、古いかたちが壊れた分だけ新しいかたちが生まれる。c すべてのビーズが流星群のようにうごき、自らを分解しながら新たな様相を生み出してゆく。きらきらと、まるで現在が終わることなく更新されていくみたいに。

別の角度からいえば、連句の魅力は、エ 連想で結ばれた全体の背景に体系が存在しない点にある。それはそのつど湧きあがるブリコラージュ（注1）精神の産物なのだ。だから鑑賞するときも主題ではなく、一句ごとの良し悪しや、連想の筋（前句からどんな展開を引き出したか）や、句と句の関係（つながり方のかっこよさ）を吟味する。このあたり、連句は神話構造と同じく、いやそれにもまして複雑だ。なにしろ概念に帰結させることのできる現象がひとつも存在しないのだから。

しかし、である。連句の途中部分についてはそれでいいとして、それでは最初の一句、すなわち オ 発句はどのようにして生まれるのか。

そういえば、とここでさっそく「そういえばの術」をくりだすが、ルイ・アラゴン（注2）に、みずからの小説作法について述べた『冒頭の一句または小説の誕生』という本がある。それによると、彼の小説には事前の構想が存在せず、自分自身思いがけず綴った「冒頭の一句」から行き当たりばったりで展開されるものだという。またその展開においては辻褄よりもむしろ語と語との、あるいは音と音との出会い、もしくは語呂合

わせといった［A］つながりを重視するらしい。

ぼくは一つのプランに、あらかじめ[d]ジュッコウされた組立てに従って、先行する想像に形を与えるために小説を書いた――この動詞のふつうの意味で――ことは、つまり一つの物語を、その展開を秩序づけたことは、一生に一度たりともなかった。ぼくの小説は最初の文章からして、それがたまたま切替装置のように作動したので、ぼくはそれらを前にしていつも一読者のような無垢（むく）の状態にあった。まるでそれについて何も知らない一人の他人の本をぼくが開き、すべての読者のようにその中を歩きまわり、それを知るのにそれを読むこと以外に自由になる方法を知らないというように、いつもすべては経過したのである。（ルイ・アラゴン『冒頭の一句または小説の誕生』渡辺広士訳、新潮社）

カ インキピットとは詩、歌、あるいは書物などの書き出し数語のことで、もともとはラテン語で「ここに始まる」という意味だ。作品に題というものが必然でなかった時代、西洋では冒頭の数語をその代わりとして立てるのが通例だった。現代では作品の内容を「象徴」する数語をもって題とするのが主流になってしまったけれど、インキピットに由来する題には、そこから始まる文字世界に生成のライヴ感や予言書めいた品格をあたえるえもいわれぬ力がある。個人的には、田園詩の題などはインキピットでないと気分が乗らない。あと歌曲も。もしもハイネ(注3)とシューマン(注4)の歌曲集『詩人の恋』に象徴的な題なんかついていようものなら、ああ、わが魂のふるえが歌となっていまここにほとばしってしまったよ、といった雰囲気がまったくもって失われてしまう。また[キ]漱石の『吾輩は猫である』はインキピットがそのままタイトルになっているけれど、そのおかげでこの小説の滑り出しは、可塑性や［B］がいささかも損なわれていない。その点、『吾輩は猫である』との関連を指摘されるホフマン(注5)『雄猫ムルの人生観』には、作品の手法の相違がその題に如実に現れている。冒頭の一句を題として起こした漱石に対し、ホフマンの方はそのタイトルが示す通り構想あっての小説なのだ。

アラゴンの本に戻ると、[e]そこで述べられている小説作法はかなり平凡だ、ただ一点、彼が書き出しの数語のことをわざわざ「冒頭の一句」と強調していること以外は。もちろんアラゴンは、ここで「冒頭の一句」という語を従来の意味合いからずらして使用している。ふつう、インキピットとは「すでに存在する作品」を便宜的に呼びならわすためのものだから。だがここで重要なのは、生成的な作品をものするための魔法が「ぐうぜん書かれた最初の数語」に隠されていることだ。この数語は、作者がその存在を知らなかった記憶を事後的に掘り起こし、未知の世界を創り出す不思議な効果を持っている。そしてアラゴンがそれに気づいたのは、まさにインキピットという語に触発されて、その意味を展開させることによってだった。

さて。ここまで書いて、この本の担当編集者であるカゲヤマさんに送ると、「締めの段落が欲しいですね」との返信が来た。たしかに。言いたいことはわかる。しかし最後を巧みに締めると「書きっぱなし」の感じが消えてしまう。「そういえばの術」が息づく世界線においては、途中まで書き、ふとお茶に呼ばれて席を離れ、そのままになってしまったような尻切れとんぼの[f]テイサイが、わたしは美しいと思っている。

（小津夜景『ロゴスと巻貝』、出題上の都合により一部改変）

注1　ブリコラージュ――ありあわせのもので何かを作り出すこと。
注2　ルイ・アラゴン――一八九七～一九八二年。フランスの作家。
注3　ハイネ――ハインリヒ・ハイネ。一七九七～一八五六年。ドイツの詩人。
注4　シューマン――ロベルト・シューマン。一八一〇～一八五六年。ドイツの作曲家。
注5　ホフマン――エルンスト・テオドール・アマデウス・ホフマン。一七七六～一八二二年。ドイツの作家。

問一　二重傍線部a「きまま」の意味に最も近い言葉を、次の①～④から**一つ**選びなさい。

15　①　恣意的　②　不自然　③　独善的　④　不如意

問二　二重傍線部b・d・fと同じ漢字を用いるものを、次の①～④からそれぞれ**一つずつ**選びなさい。

16　b「オンショウ」
①　罪をツグナう　②　トコノマに花を飾る
③　アサで織った服　④　オンショウの品を与える

17　d「ジュッコウ」
①　学習ジュクに通う　②　トマトが赤くウれる
③　ダマって深く考える　④　ジュツ後の経過を見る

18　f「テイサイ」
①　燃料がフッテイする　②　庭のボンサイ
③　おセイボの季節　④　ゼッタイゼツメイ

問三　二重傍線部c・eで用いられている表現技法はそれぞれ何か。組み合わせとして最も適切なものを、次の①～④から**一つ**選びなさい。

19　①　c＝直喩　e＝対句
②　c＝比喩　e＝体言止め
③　c＝直喩　e＝倒置法
④　c＝隠喩　e＝反語

問四　傍線部ア「こうした予定調和」の説明として最も適切なものを、次の①～④から**一つ**選びなさい。

20　①　無作為に言葉をつなげて自由に文章を書こうとしても、結局は首尾一貫した平凡なものになってしまうこと。
②　何をどう書けばよいか分からない際に、あらかじめ見通しを立て、書き出しと結論を対応させて全体を整えること。
③　連想のみに頼って言葉を連ねていけばいくほど、言葉と言葉の間に想定外のつり合いが生まれてくること。
④　思い通りの言葉を紡ごうとすると、それを意識することがかえって、知らず知らず書き手に矛盾をもたらすということ。

問五　傍線部イ「巻物が一個の概念や系統にとじてしまわないように」するのはなぜか。最も適切なものを次の①～④から**一つ**選びなさい。

21
① 巻物を構成する句の数が多ければ多いほど好ましい、とされるのが連句的発想の世界の価値観だから。
② 事前にルールで禁止しておかないと似たような句が続いてしまい、巻物全体が複雑になってしまうから。
③ 連句の巻物は様々な物事を句に表現して変化に富んでいるのが良く、一貫した主題はないとされるから。
④ まとまりのある完結した巻物は、次に新たな句を生み出そうとする創作意欲を失わせてしまうから。

問六　傍線部ウ「万華鏡」の特徴を筆者はどのように考えているか。最も適切なものを次の①～④から**一つ**選びなさい。

22
① 今ここにある物事をきらきらと輝かせることで、古びた秩序を絶え間なく更新し続けていくもの。
② 断片の組み合わせを無限に創り出しつつ、見る者の思考と想像力を柔軟に作り替えてしまうもの。
③ 見る側の視点を変えることによって、目に見える形状が次々に変わっていく多様性に富んだもの。
④ 既存の形態をばらばらにしながら、そのつど要素を組み合わせて新しい形を生み出し続けるもの。

問七　傍線部エ「連想で結ばれた全体の背景に体系が存在しない」とあるが、具体的にはどういうことか。最も適切なものを次の①～④から**一つ**選びなさい。

23
① 自由な連想が複数の句を接続する原理なので、反覆を回避する決まりは設けられていないということ。
② 連想で句と句は結合しているものの、なぜそのように結びついているかを問う視点は取りづらいということ。
③ 句と句はつながり複数をなしているが、それらを単一の視点から論理的に説明することはできないということ。
④ 多くの句は脈絡なく結びついているため、個々の句をとりまとめて初めて全体の主題が浮き彫りになるということ。

問八　傍線部オ「発句はどのようにして生まれるのか」の答えとして最も適切なものを、次の①～④から**一つ**選びなさい。

24
① 書き手の知見に従って、適切な時機に意識的に生まれる。
② なりゆきの中で書き手が予期しない形で偶然に生まれる。
③ 書き手の事前の構想に沿うような形で合理的に生まれる。
④ 読み手の純粋さに書き手の心が動かされ、劇的に生まれる。

問九　空白部 A に入る言葉として、最も適切なものを次の①～④から**一つ**選びなさい。

25
① 不可欠な　② 倫理的　③ 迅速な　④ 非論理的

問十　傍線部カ「インキピット」を作品の題名とした場合の特徴はどのようなものか。最も適切なものを次の①～④から**一つ**選びなさい。

26

① 冒頭から全貌が分かり作品世界に没入しやすくなるのが利点だが、そのぶん読者の想像力をかき立てる伏線や余白は失われてしまい能動的に読み進めるのが難しくなる。

② 作者の繊細な心の動きをより身近に感じて感情移入しやすくなる反面、初めから特定の主張を押しつけられているような圧力も強まるため、物語に共感しづらくなる。

③ 思わせぶりな出だしによって期待外れに終わる可能性は高まるものの、そのことがかえって優良な読者層の獲得につながり、結果的に作品の品位を高めることができる。

④ 作品の内容や作者の構想を題名で示唆することは難しくなりがちだが、未知の世界が展開していく現場を目の当たりにしているような雰囲気を享受することができる。

問十一　傍線部キ「漱石の『吾輩は猫である』」とあるが、夏目漱石の作品の書き出しはどれか。最も適切なものを次の①～④から**一つ**選びなさい。

27

① 国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。

② 親譲りの無鉄砲で小供の時から損ばかりしている。

③ 「おい地獄さ行ぐんだで！」

④ 木曾路はすべて山の中である。

問十二　空白部 B に入る言葉として、最も適切なものを次の①～④から**一つ**選びなさい。

28

① 湧出感覚　　② 色彩感覚

③ 平衡感覚　　④ 庶民感覚

問十三　問題文の内容と合致するものを、次の①～④から**一つ**選びなさい。

29

① 『吾輩は猫である』と『雄猫ムルの人生観』には決定的な差異がある。それは、前者が読者の反応を踏まえながら臨機応変に書き上げられた作品であるのに対し、後者が全体の構想のもとに書き上げられた作品であることにほかならない。

② 筆者が締めの段落を設けなかったのは担当編集者の求めにあらがったからではない。そうではなく、「そういえばの術」を駆使した冒頭と中盤部分に結末をも対応させることで、文章全体のまとまりを演出し、有終の美を飾るためであった。

③ 人間は似たような話題を繰り返して同じことを考えるのを本性とする。だから一見すると細かすぎる連句のルールの数々は、人間の本性を踏まえた制約によって連想の幅を広げ、多様で複雑な作品を生み出す創造的なものなのである。

④ アラゴンにおけるインキピットは、不思議な効果を持つ魔法の言葉と言ってよいだろう。なぜならその語は、まったく存在していなかった記憶を事後的に作り出すように働きかけ、未知の作品世界を創出するきっかけとなったからだ。

Ⅲ

次の問題文は『うつほ物語』の一節である。これを読み、後の問いに答えなさい。

＊　父太政大臣の賀茂詣でに同行した若小君は、道中、清原俊蔭の娘をかいま見て心引かれる。帰途、若小君は一人俊蔭の家を訪れる。

若小君、家の秋の空静かなるに、見めぐりて見たまへば、野、やぶのごとおそろしげなるものから、ア心ありし人の急ぐことなくて、心に入れて造りしところなれば、木立よりはじめて水の流れたるさま、草木の姿など、をかしく見どころあり。蓬、葎の中より、秋の花はつかに咲き出でて、池広きに月おもしろく映れり。おそろしきこと覚えず、おもしろきところを分け入りて見たまふ。秋風、河原風まじりてはやく、草むらに虫の声乱れて聞こゆ。月、隈なうあはれなり。人の声聞こえず。かかるところに住むらむ人を思ひやりて、独りごとに、

虫だにもあまた声せぬ浅茅生にイひとり住むらむ人をこそ思へ

とて、深き草を分け入りたまひて、屋のもとに立ち寄りたまへれど、人も見えず、ただ薄のみいとおもしろくて招く。隈なう見ゆれば、なほ近く寄りたまふ。

東面の格子一間あげて、琴をみそかに弾く人あり。立ち寄りたまへば入りぬ。「あかなくにまだきも月の」(注1)などのたまひて、簀子のはしにゐたまひて、「かかる住まひしたまふはたれぞ。名のりしたまへ」などのたまへど、答へもせず。内暗なれば、入りにし方も見えず。月やうやう入りて、

立ち寄るとみるみる月の入りぬれば影ウを頼みし人ぞわびしき

また、

(A)入りぬれば影も残らぬ山の端に宿まどはして嘆く旅人

などのたまひて、エかの人の入りにし方に入れば、塗籠(注2)あり。そこにゐて、もののたまへど、[X]答へもせず。若小君、「あなおそろし。音したまへ」とのたまふ。「おぼろけにてはかく参り来なむや」a などのたまへば、オけはひなつかしう、童にもあれば、少しあなづらはしくや覚えけむ、

(B)かげろふのあるかなきかにほのめきてあるはありとも思はざらなむb とほのかに言ふ声、いみじうをかしう聞こゆ。いとど思ひまさりて、カ「まことは、かくてあはれなる住まひ、などてしたまふぞ。たが御族にかものしたまふ」とのたまへば、女、キ「いさや、何にかは聞こえさせむ。かうあさましき住まひしはべれど、立ち寄り訪ふべき人もなきに、あやしく覚えずなむc」と聞こゆ。君、「疎きよりとしもいふなれば、おぼつかなきこそ頼もしかなれ。いとあはれに見えたまへれば、えまかり過ぎざりつるを、思ふもしるくなむd。親ものしたまはざなれば、いかに心細く思さるらむ。たれと聞こえし」などのたまふ。答へ、クたれと人に知られざりし人なれば、聞こえさすともえ知りたまはじ」とて、前なる琴をいとほのかにかき鳴らしてゐたれば、この君、ケいとあやしくめでたしと聞きゐたまへり。夜ひと夜ものがたりしたまひて、いかがありけむ、そこにとどまりたまひぬ。

（俊蔭巻）

注1　あかなくにまだきも月の――「あかなくにまだきも月の隠るるか山の端にげて入れずもあらなむ」（古今集）の一部。

注2　塗籠――周囲を厚く壁で塗り、明かり窓を設け、戸口から出入りする部屋のこと。

注3　疎きより――最初は疎遠な間柄から親しくなっていくものだとする当時のことわざなどに拠る。

問一　空白部 X に入る最も適切な言葉を、次の①～④から**一つ**選びなさい。

30
① をさをさ　② さらば　③ いかにぞ　④ よしや

問二　波線部「えまかり過ぎざりつる」の「え」の用法として最も適切なものを、次の①～④から**一つ**選びなさい。

31
① 動詞をともない、仮定の意味を表す。
② 動詞をともない、反語の意味を表す。
③ 打消表現と呼応して、禁止の意味を表す。
④ 打消表現と呼応して、不可能の意味を表す。

問三　二重傍線部a～dの文法的説明として最も適切なものを、次の①～④から**一つ**選びなさい。

32
① aは完了の助動詞＋推量の助動詞、bは終助詞、c・dは係助詞
② a・bは完了の助動詞＋推量の助動詞、c・dは終助詞
③ aは係助詞、b・cは終助詞、dは完了の助動詞＋推量の助動詞
④ aは係助詞、bは終助詞、cは係助詞、dは完了の助動詞＋推量の助動詞

問四　傍線部ア「心ありし人」と同じ人物を指しているものを、次の①～④から**一つ**選びなさい。

33
① 傍線部イ「ひとり住むらむ人」
② 傍線部ウ「影を頼みし人」
③ 傍線部エ「かの人」
④ 傍線部ク「たれと人に知られざりし人」

問五　傍線部オ・カ・キの意味として最も適切なものを、次の①～④からそれぞれ**一つずつ**選びなさい。

34
オ「けはひなつかしう、童にもあれば、少しあなづらはしくや覚えけむ」
① その様子が親しみやすそうであり、自分はまだ子供でもあるので、少し面倒に思ってしまったのだろう
② その様子が親しみやすそうであり、相手はまた子供でもあるので、少し気を許せると思ったのだろうか
③ その様子から昔のことが思い出され、自分はまだ子供でもあったので、少し恥ずかしいと思ったのだろう
④ その様子から昔のことが思い出され、相手はまだ子供でもあったので、少し軽蔑してしまったのだろうか

35
カ「まことは、かくてあはれなる住まひ、などてしたまふぞ」
① 本当にまあ、このような寂しい暮らしをどうしてなさっているのですか
② 本当にまあ、このように風情ある邸宅などをお作りになったのですね
③ 率直なところ、このような寂しい暮らしをお続けになってはいけません
④ 率直なところ、このように風情ある邸宅をどうしてお捨てになってしまったのですか

36
キ「いさや、何にかは聞こえさせむ」
① いやいや、何を申し上げても聞こえないでしょう
② いやいや、どういうことなのかおわかりでしょうか
③ さあ、どうして申し上げることができましょうか
④ さあ、何のことだかまったくわからないのですが

問六　(A)の和歌の説明として最も適切なものを、次の①～④から**一つ**選びなさい。

37　① 俊蔭の娘を「影」に、若小君を「山の端」に、俊蔭を「旅人」にたとえている。
② 俊蔭の娘を「影」に、俊蔭の家を「山の端」に、若小君を「旅人」にたとえている。
③ 俊蔭を「影」に、俊蔭の家を「山の端」に、俊蔭の娘を「旅人」にたとえている。
④ 俊蔭を「影」に、俊蔭の娘を「山の端」に、若小君を「旅人」にたとえている。

問七　(B)の和歌の「あるかなきかにほのめきてある」とはどのようなことを表しているか。最も適切なものを次の①～④から**一つ**選びなさい。

38　① 生きているのかわからないくらい体が衰弱していること
② 聞こえるか聞こえないかわからない程度に琴を鳴らすこと
③ あるのかないのかわからない程度の恋心を抱いていること
④ 居るか居ないかわからない様子でひっそりと暮らすこと

問八　傍線部ケ「いとあやしくめでたし」とあるが、若小君がそう思ったのはなぜか。最も適切なものを次の①～④から**一つ**選びなさい。

39　① 一人荒れ果てた家に住んでいる俊蔭の娘が、すばらしい音色で琴をかき鳴らしたから。
② 俊蔭の娘に父親の素性をたずねても決して明かさず、ひたすら沈黙を守っていたから。
③ これまで世間との交際を絶ってきた俊蔭の娘が、少しずつ心を開くようになったから。
④ 生活に困窮していた俊蔭の娘が、父親から譲られた琴を手放さずに持っていたから。

問九　問題文の内容と合致するものを、次の①～④から**一つ**選びなさい。

40　① 琴を弾いていた俊蔭の娘は、若小君が近づくと格子を上げて出迎えた。
② 若小君は娘が隠れていた塗籠に入り込み、立て続けに二首の歌を詠んだ。
③ 俊蔭の家は雑草が生い茂るばかりで、若小君は何の風情も感じなかった。
④ 俊蔭の娘と夜通し語り明かした若小君は、そのまま俊蔭の家に泊まった。

問十　『うつほ物語』と同じ時代に成立した作品を、次の①～④から**一つ**選びなさい。

41　① 万葉集　② 平家物語
③ 枕草子　④ 宇治拾遺物語

国語の問題はここまでです